奈良・平城京跡（へいじょうきょう）(2)

1　所在地　奈良市四条大路一丁目

2　調査期間　第一五一―一次調査　一九八三年（昭58）三月～五月

3　発掘機関　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

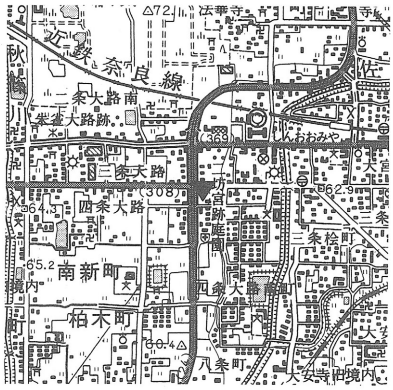
4　調査担当者　代表　岡田英男

5　遺跡の種類　都城跡

6　遺跡の年代　古墳時代、奈良時代、中世・近世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

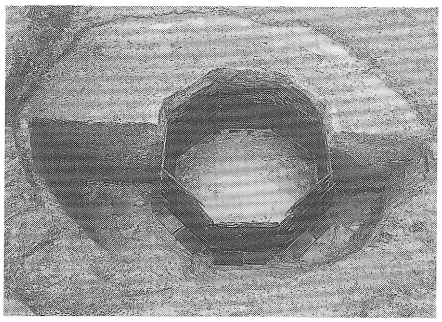
調査地は左京四条二坊一坪にあたる。左京四条二坊は平城宮にもほど近く、東半八町は藤原仲麻呂の田村第と推定され、また市原王の居住も知られるなど、位階の高い人物の宅地と想定される場所である。今回の調査は社屋建設に伴うもので、調査面積は約六五〇㎡である。



（奈　良）

調査の結果、地表下二〇～三〇㎝で奈良時代の遺構面を確認し、多数の柱穴・土坑・井戸などを検出した。遺構は、奈良時代前期、中期、後期で様相を異にする。前期には、坪は南北に四分され、各敷地に小規模の建物があったが、中期には一坪占地の宅地となり、坪の中心に大規模建物を整然と配置するようになる。中でも中心建物SB二六一〇は、南北両面に廂をもち、桁行七間梁行四間、柱間一一尺等間と推定される大型掘立柱建物である。奈良時代後期には、大型の建物はなくなるが一坪占地は踏襲され、八角形の井戸SE二六〇〇が設けられる。

井戸SE二六〇〇は、直径一・五m、一辺五九・五～六四・五㎝、現状で深さ一mほどの平面八角形の井戸である。塼を八角形に一段並べ、塼の上に木枠を八角形に組み上げている。木枠は下から三段目までほぼ完存、四段目が三辺に残っていた。一段目は高さ二五・五㎝に揃えているが、二段目以上は不揃いである。板の厚さは約六㎝ある。井戸底には塼が隠れる高さまで小砂利が敷き詰められていた。また、井戸の周囲には、一辺約四・五mの範囲で塼敷きになっていたと思われる痕跡がある。井戸の掘削時


井戸 SE2600（西から）

期は、掘形埋土の遺物からみて天平末年頃で、奈良時代末期には埋められたと考えられる。なお、掘形内の井戸枠に接する位置から、当初は枠板の各辺中央に挿し立ててあったとみられる細棒一五本が出土した。井戸設置時の祭祀に関わる遺物であろう。

今回紹介するのは、八角形を構成する井戸枠の材にみられる墨書である。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「可　宗　□
〔鰹カ〕□　□　□　□　□　□　八　□　□　」
255×883×58　061

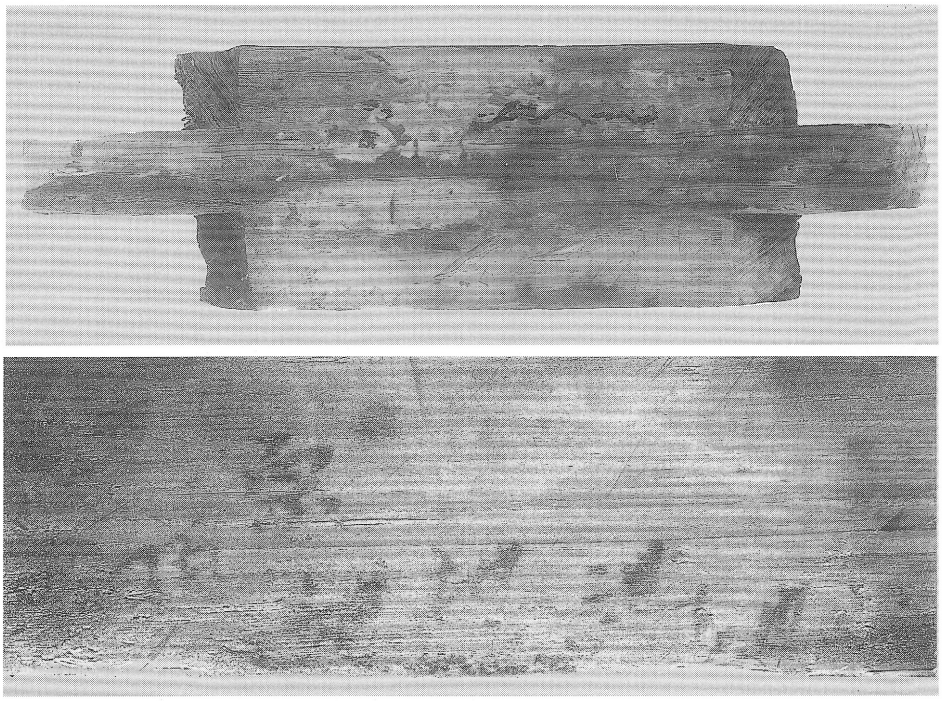
文字の大きさは二cm角ほどで、八角形を構成する井戸枠のうち、東一段目の外面下部左寄りに記されている。井戸の祭祀に関わる可能性も否定はできないが、文意の取れるようなものではなく、同じ文字や旁を共有する文字が現われることからみても、習書であろう。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』（一九八四年）

同『平城宮発掘調査出土木簡概報』一七（一九八四年）

（渡辺晃宏）



墨書部分（拡大）